

山と博物館

第 6 卷 第 6 号

1961年5月25日



剣岳

尾根を吹く風も、あとたたかみをおびたる。
5月、剣岳に冬山と異なった味がある。
種子池小屋付近より 高橋秀男撮影

大町山岳博物館

白馬岳小史

長 沢 武

一、山麓民に根付く原始的山岳崇拜観念

信州側では、顔を上げればそこに岬々と聳える白馬岳一連の高山は、原始住民の崇拜の的となったことは間違いない。

朝に夕に一日の仕事の合間にも、天候の変化につけ、降雪、降雹、融雪、晩霜、嵐、吹雪、水害、干害等につけ彼等にとっては農耕と生活に直接関係の深いこれらのこと柄が、いずれもこの眼の先にある山岳との結び付きの深いことを知らされ、日月より以上にこの高山は、該地方民の原始的自然崇拜観念の中心となり、他の何れの地方民よりこの山麓民の心の底深く焼き付けられたのであろう。(白馬岳の名の起り、「代かき馬」の現われで動起しの時期を判断したことなど、山と山麓民の結びつきが伺える美しい例である。)

彼等はこの西方間近に、四季雪を頂いて連なる3,000米級の山、後立山連峯一連の山を総称して、唯単に「西山」または「岳」といい、これらの高山に深入りし荒すことは山ノ神の祟が恐しいとして禁じ、冷害、干魃等天候まかせの農業、その日の運まかせの狩猟、悪病の流行の治ゆなど神がかりな無知と信仰の生活は、明治時代まで続き、その一部は尚今日まで残るものがある。

現に明治38年8月第3回目の白馬登山に来た、志村烏嶺氏や学術登山の武田久吉博士ら一行は、細野部落で「近年冷害の続くのは、他所者が来て岳に入るためである」と虐待され、10日間も足止めを喰い、役場、警察に依頼してもラチが開かなかったというが、これは昭和30年日本のマナスル登山隊がサマ部落で受けた虐待と全く同一なもので、笑えない事実である。

二、山岳宗教時代の白馬岳周辺

白馬岳の開発の特長は、日本の登山史の中で、ウェイトの重い、宗教的登山による開発ではなかったとされている。しかし白馬岳は宗教家によって初登攀されなかったかもしれないが、宗教(本地垂々く説)がこの山麓の民衆にゆきわたり、「山岳宗教時代」に入ってから信仰登山時代は、いままでの原始的自然崇拜思想に基く山岳観から脱皮して、神仏習合の新らしい山岳観に成長していったのである。飯森の長谷院(明徳2年)沢渡貞麟寺(天正15年)沢渡神社(天正16年再建)など、神仏習合の思想がこの地方に広まり始めた時代を語るもので、この頃現白馬村地方は60代に巨り仁科氏一族の領める所で、氏も当時戦国時代の武将の常として、神仏の信仰厚く民衆もまたこおした影響を受けて、いままで唯単に恐れ近づくことを禁じていた高山に攀登り、さゝやかな祠を建て、或は偶像を祭り山ノ神の怒への祈願と、救を求



白馬岳山頂近くにうずもれていた地藏菩薩
めたことが、今に残る僅かな史料にうかがえる。

1、飯森神社奥の院

飯森田中文書によれば、「飯森神社取調」に「永徳二(1,382)丑年三月当飯森平川入字唐沢頂上池沼に棲息せる大蛇、年々久しく右年月しばしば人里に来て、農作及人畜を害すること甚だしく、依って城主飯森日向守春盛公城内守護神として、永徳參年六月十六日池沼の西北に石造の奥宮を創立、尚城主より丑寅の方延長參百間之所に里宮を勧請し、后天正十六年吹野火災の際社内ごとく鳥有にきし、文禄元年(1592)三月十六日再建

一、奥宮 石造正面式尺、側面式尺五寸此の坪教

壹合四勺……以下略」とあり、この石の祠は現在も八方池西北の丘にある。

2、大日岳の大日如来

大日岳(2768.8米)山頂には非常に古い、建立年代は

もち論その容貌もはっきりしない大日如来の石像が祭

3、白馬山頂の潜れる地藏菩薩

昭和10年7月28日地元山案内人が、客を連れて白馬山

頂より大池への途上、山頂より三国界への下りにさしかゝる地点の礫中にうもれ、頭部の頂のみを出している石仏を発見、掘り出した所供養年月も記入されていない砂岩造りの古い地藏菩薩であった。当時山麓の言い伝えを調べた所、天正2年(1574)南小谷の源長寺開祖、洞光和尚が砂岩に刻んで大日岳山頂に祭ったと伝えられていたが、その後誰かに持ち去られて無くなり、再び刻んで祭ったという話であるが、おそらくその最初の物ではないかといわれている。この仏像は神の崇を恐れ、またその地にうめられ、昭和24年再び掘り出された。

4、八方池風除地藏菩薩

八方尾根には、八方池を見下す尾根上に、長谷院19世が慶応3年(1867)3月、大風の後風除けのために祭った地藏菩薩の石像がある。この地藏尊は右手に錫杖を、左手には摩尼宝珠を持つ普通の延命地藏である。

5、天狗岳の地藏菩薩

天狗岳(2812米)山頂下の天狗の池畔にも地藏尊が祭つてある。これも八方池のものと同じ延命地藏で、同じような造りであるが、この地藏菩薩は雨乞地藏であると伝えられ、近年迄干害の時は細野方面よりヤリ温泉を経て雨乞に行ったものである。

以上は白馬岳周辺に残る往時民衆の信仰の名残をとどめるものであるが、これらは当時の民衆思想の表われの一つであって、民衆の山岳信仰心は非常に強いものがあつたらしく、今日各部落に残る山の講(旧2月17日と10月17日)や、山ノ神(大山祇命)の祠も当時からのもので、風除、雨乞の信仰も今日に尚残り、飯森神社は戸隠神社の配下にあり、北安曇地方には戸隠講が多く、今でも雨乞、御水借りに戸隠神社に行く習わしがある。

三、探鉱、採薬、狩猟時代の白馬岳

1、六左衛門滝の伝説

白馬岳における探鉱の歴史としては、朱殿坊より硫黄を搬出した説がある。昔日山麓民はツケンバ(木片に融けた硫黄を付たもの)用に、ヤリケ岳の裏山より硫黄を芝ぞりに積んでヤリ温泉の雪溪を下り、里へ搬出していたが、たまたま六左衛門は現六左衛門滝に落ち、七日七晩救いを求めたという伝説があり、今も朱殿坊山は赤褐色をして草樹育たず、亜硫酸ガスの噴出があり、鳥など死んでいるという。

2、ヤリ温泉引湯と大遭難

ヤリ温泉は古くより知られていたが、明治初年頃より細野部落でこの引湯が計画され、同9年7月実行に移されたが、竹筒での引湯工事中、同年11月8日地元6人を始め大工、人夫21名が一瞬にして新雪雪崩で死亡するという大惨事が起っている。

3、オコマ草の採集

コマクサは神聖なる神の座、高山に自生する霊薬とし

て珍重された。たまたま高山植物の豊富な白馬岳一帯に沢山あることが解り、既に早くから開け、信仰登山客を多く持つ木曾御嶽より、この岳で信者に売る霊薬なる該植物を求めて白馬に業者が大勢来、高額で買い取ったので採薬登山が盛んに行われ、大正時代まで続いた。

4、狩猟と伝説

白馬岳に残る伝説には、狩猟に関係あるものが多い。イ、己之吉と雪女の話。ロ、渋谷工門と双子岩の天狗の話。ハ、池ノ平の霊池と狐師の遭難。ニ、狐師九兵衛と謡曲の話などが伝えられているが、年代は全く不明である。

四、越中、越後方面の史料

1、越中方面の史料

立山は大宝元年(1361)に慈興上人によって開かれた。天正12年(1584)には佐々成政のザラ峠から針ノ木峠越えの記録がある。下って徳川時代には加賀の前田藩では国境警備、資源開発に意を注ぎ、慶長年間には黒部奥山元締をおき、寛永(1623)以後には絵図作製のため国境の見分け登山が行われ、慶安元年(1648)には針ノ木峠やヤリケ岳の大規模な登山が行われ、その結果黒部奥山廻り役を制定、国境警備、藩林保護といった軍事目的による役人ができ、日記が残っている。下って享保20年(1735)には藩医5名を主とした、2百余名からなる採薬登山が行われた記録がある。

2、越後方面の史料

越後側についてみれば、戦国時代越中の小川温泉から南下して、ヤリケ岳?を越えて大所村へ通ずる道路が、既に利用者多きことが記されているが、この頃蓮華温泉や蓮華、雪倉鉱山などが既に発見されていたものと思われる。大所村に残る山岸文書によれば、蓮華鉱山は元和3年(1617)高田藩主はこれに着目し、見分登山をしており、下って享保9年(1724)杉村万蔵という男が手を付け、奥山で雪多きため失敗し、寛政12年(1800)高田藩では再び照会を出し調査している。

その後では、文化年代、文政11年(1828)天保6年(1835)と手を付け休山、天保11年より再び探鉱、雪倉岳にも3ヶ所所舗口をみて盛んに掘り、高橋孫左衛門の手に移り長く掘りつづけ弘化年代まで続いた。

蓮華温泉はこれより古くから知られていたが、天保年間にはこゝに鉱山の飯場を置き、同13年には浴場を作った。これからみても比較的登り易き蓮華温泉方面が、この時既に雪倉岳に探鉱をみていたのであるから、この方面からの白馬岳の登頂者は必ずあったものと思われる。

五、最初の登頂者は誰か

以上項を追って、各時代、各地域の資料を拾って来たが、これらは皆白馬岳を取巻くものであって、いずれも白馬山頂を確かに踏んだという記録ではない。実際現在解っているはっきりした登頂記録は、明治も10年を過ぎ

てからである。しかし記録は残っていないとしても、何人かによって古い時代、少なくとも1600~1800年代の始めには、白馬岳は登頂されていたことであろう。

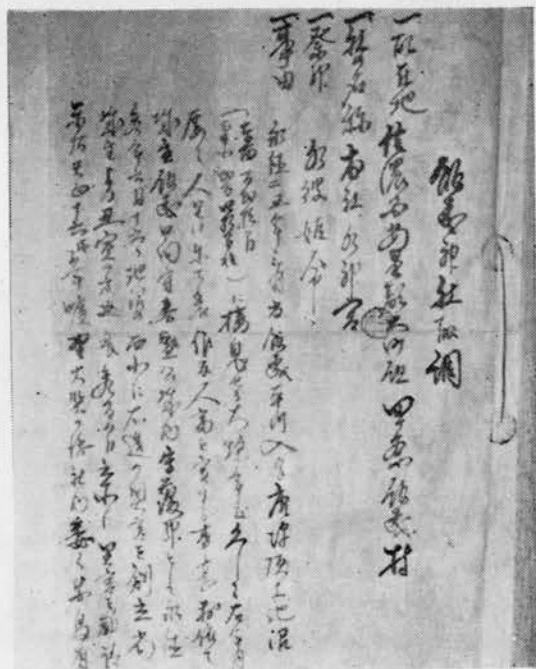
即ち、イ、信州側の資料としては、八方池の飯森神社奥の院の建立の永徳3年(1383)、同池の風除地藏の慶応3年(1867)、天狗の池の雨乞地藏(年代不明)白馬山頂のうもれる地藏(年代不明)、或は大日岳の大日如来(年代不明)などがそれを裏付けるものであるし、口越中側では、慶安元年(1648)の針ノ木、ヤリケ岳などの大規模な国境の見分登山、ハ、越後側では、元和3年(1617)以後引続く、蓮華、雪倉鉾山の開発や、天保13年(1842)以後の蓮華温泉の開発などで、比較的登り易きこの方面からの登山も、信仰深き同地方なればおそろくこの頃にあったものと思われる。

六、近代登山の黎明期

幾たの変遷を経た白馬岳の山岳史も、明治時代に入ると近代登山のれい明期がやってくる。この時代の初期の記録を尋ねると、先ず明治16年(1883)の渡辺敏、窪田畔夫両氏の登頂記録がある。白馬山頂に陸地測量部の一等三角点が埋没されたのは、明治27年10月であった。

陸軍省の我国全土に亘るこの測量は、山岳関係において、山名の統一に大きな役割をはたした。その頃望見する地域によって、同一の山でありながら異名を持ち、初期の登山家に少なからぬ不便を与えていたものであったが、現白馬岳についても、北安曇教育会編の北安曇地誌(明治39年4月)山岳の部に、始めて白馬岳なる名を用い、その附記に「明治20年以來我長野県は、其の統計書に於て、我郡に蓮花岳と称する高山ありて、國中第3の高峯なることを示すも、郡中の人々は平村に蓮華岳あるを以て統計書の誤謬ならんかを疑へり。同22年信濃教育編纂地図に初めて我郡の白馬岳に冠するに蓮花岳の名称を以てせしより我郡中の人々は驚きて越後、越中の地誌を調査し、越後、越中の名称蓮花岳なるを知れり、然れども陸軍省白馬岳の名称に従うにより、強いて他国の称を用いるを要せず」とある。

さて、同27年には、21年日本に来朝以来各地の高山を抜しようしていた、日本アルプスの父ウエスタン氏はハミルトン氏案内浦口某を連れ、糸魚川を経て平岩より登っている。次いで同31年8月には、当時大町小学校長であった河野齡藏氏は教員の岡田邦松、吉沢秀吉氏と植物採集に登り、翌32年その採集記録を、信濃教育(153号)に載せているが、これは白馬岳が学術的に世に紹介された最初のものである。当時山頂には測量員の作った、夜露をしのぐ程度の2個の石室があるのみであった。そしてこの登山の話が、当時の尋常小学校国語読本巻九に、「白馬岳」と題して載り全国に白馬岳が紹介された。同明治35年には山崎直方博士の地質調査登山があり、お



飯森神社取調(神社の沿革が書いてある)

花畑その他に氷河の擦痕ある岩を発見、日本氷河論の問題を引起した。同年8月には伊藤氏の植物採集、36年矢沢米三郎、田中貢一、折井最一氏の植物採集登山があり37年には寺崎留吉、矢崎斉知郎、上野卯三郎、志村烏嶺春原平八郎、倉島賢二郎、安田篤等の植物採集登山があり、志村烏嶺氏の、小雪溪からの杓子岳の写真は英国山岳会誌、アルパインジャーナルに載ったが、これは日本アルプスの写真が海外に紹介された最初である。

この頃より白馬岳は、高山植物の宝庫として学者、学生間に知られ、登山が急激に多くなり、登山の為の登山も、登山家により行なわれるようになり、後立山の縦走祖母谷温泉への下り、またはこの方面からの登り、又小川温泉方面への下りなど未踏のルートを求めて来る者もあり、明治44年の記録によると、この年の夏山登山者は154人が信州側から登っている。当時四ツ谷には山木旅館1軒あるのみで、ここの主人松沢貞逸氏は早くもこの年に北安曇下初の自動車を購入、大町四ツ谷間の旅客の便をはかった。

この頃白馬銅山、大黒銅山の開業があった。これらは共にれい明期に登山路の整備、宿舍の便等を登山者に供へたことは、大きな意義がある。白馬銅山は明治34年試掘、白馬尻、惣平に小屋掛けして着手、同40年迄続いたので、白馬尻迄は馬も通へる程良い道であった。大黒銅山は明治41年より大正7年迄続き、山麓より唐松岳迄牛路が完成された。

七、大正時代と白馬岳

明治も30年代の終りに近ずくと、博物学者を始めとし学生、一般人等北は北海道、南は広島辺からも、白馬岳へ登る人は年々増える一方であった。当時若冠20才をわずか過ぎたばかりの、四ツ谷山木屋の主人松沢貞逸氏は早くも白馬岳の開発に目をつけ、河野氏あたりのすゝめもあって明治の晩年には頂上に、測量部員の使用した石むろを利用して、9尺×2間の山小屋を建築した。

この頃の白馬岳を北安曇教育会発行「白馬岳」(大正2年)によつてみると、白馬岳への登路は、イ、大所方面よりの糸魚川口。ロ、祖母谷温泉よりの越中口。ハ、信州口で、小川温泉よりの路はなく、祖母谷ルートも最近開かれたものであった。

しかし、河野齡藏、矢沢米三郎、志村烏嶺、田中貢一など県下教員を中心に白馬への登山熱は益々盛んで、皇室にまで及んだ。大正2年には、始めて5万分の一「白馬岳」の地図が公にされたが、同5年8月17日には東久邇宮稔彦王殿下、大正7年8月3日には久邇宮邦彦王殿下が登頂している。この頃の登山者数については、大正8年11月29日付の信濃毎日新聞に、諸高山の登山人員が載っているが、北ア関係では槍ヶ岳425、穂高96、燕岳408、鹿島154、爺岳275、針ノ木70、白馬3302、杓子52、大黒225、となって白馬がだん然多い。

宿泊施設も年々増える登山客に、松沢氏もその後大正4年に2棟を新築、その後も長屋式にバラック建のものを増設して行ったが、長野県としても最近益々盛んとなる登山熱に、河野氏等の努力もあって県費支弁の山小屋を建設する計画を進め、県下8ヶ所の山にそれを建てることとなり、白馬、唐松岳の2ヶ所がその内に入った。けれども神城は唐松の権利を放棄北域村へ譲り、大正8年総工費450円の4間×2間半の小屋が難山上の稜線の近くに出来、細野青年会がこれを経営することになった。

さて、大正の時代は、白馬岳のルートも夏山の一般的なものは一応登られ、山岳家の間には厳冬季の登頂を旨とするものがあつた。勿論それは後立山連峯ではこの白馬岳が最初であつた。大正9年3月慶応の山岳部にあつた大島亮吉氏らが、信州側より白馬岳スキー登山を試したに始まる。しかしこの行はその目的を達し得なかつたが、次で10年3月関温泉笹川速雄氏一行が、蓮華温泉より入って、白馬岳の冬季初登攀に成功された。その後も幾度か各パーティーにより攻撃されたが、成功者少なく、厳冬季登山として最初のものは昭和元年12月であつたと伝えられる。

八、昭和時代の白馬岳

大正10年に始まる白馬岳の冬季スキー登山は昭和初年

に至って全盛期を迎える。昭和4年以後特に関西学生山岳連盟に属する各山岳部員を中心として、信州側より白馬連峯に至る種々なルートの組織的な研究が続けられたこの間昭和4年、難山の現村営ホテルの位置に県費補助で村営石室小屋が建設された。昭和5年、既に大正年間松本より大町までは信濃鉄道が開通して(料金70銭)大糸線も神城まで開通していたが、大町より四ツ谷へは自動車で1時間(料金75銭)で着いた。その年の頂上小屋の料金は寝具なしで1円70銭、昼食50銭、弁当30銭、毛布1枚10銭であつたが、折からの不景気もなんのその7月下旬1日平均200人からの登山客があつた。この年の3月には、田中伸三氏の白馬岳主稜の初登攀があつた。

昭和6年不景気いよいよ深刻となるや、学生などは荷上人夫を志願してどしどしおしおかけ、8月1日は村営小屋135、頂上小屋200名の宿泊者で、すし詰の盛況をみている。この当時の流行に夜行登山があつた。

昭和8年白馬館では洋室付の二階建新館一棟を新築、13年にはさらにこの裏に二階建一棟を新築した。しかし激増する登山客に同年北域村でも、間口8間裏行5間の三階建宿泊所を新築、村営小屋は合計4棟となった。この間昭和10年8月5日には李王殿下、同妃殿下の御登山同11年には山頂郵便局舎の建設があつた。

昭和14年よりは、いままで別々の経営であつた白馬岳の宿泊所の経営も、白馬館と北域村が見苦しい客引きをやめ、白馬岳全域に亘り、登山者のために共同経営協定が結ばれた。(同年の夏山登山者は11,556人を数えた)昭和15年白馬観光協会が誕生、同年8月には久邇宮家彦王殿下の白馬より針ノ木への縦走がなされた。

昭和18年は太平洋戦争勃発の年であるが、8872人が登山している。しかしこの年を界に登山者は急激に減り、戦後ようやく復活された。しかし食糧難の昭和21年の登山者は1,000人を下廻つた(けれども意外なことに女子の登山者がその60%をしめていた。)以後漸時増加し、昭和27年には10,622人を数えるに至り、昭和33年には、31,712人とふくれ上つた。(以上登山客数は、いずれも小屋泊りの人員である。)

九、むすび

白馬岳の開発史の資料集めに心して1年登山史の編集ということの難しさが解た。「山と博」編集部的好意で、未完成のまま手もとにあるもの、一部よりまとめてみたが、大方諸賢の御指導と資料についての御教示をお願いする次第である。

写真については、本誌19号に福岡孝行先生の「白馬百年」に載つているものは、重複をさけたのでそれを参照されたい。(山博調査員・白馬村役場)

針ノ木岳 赤沢岳周辺

—大沢小屋を中心とした積雪期のパリエーション・ルート—

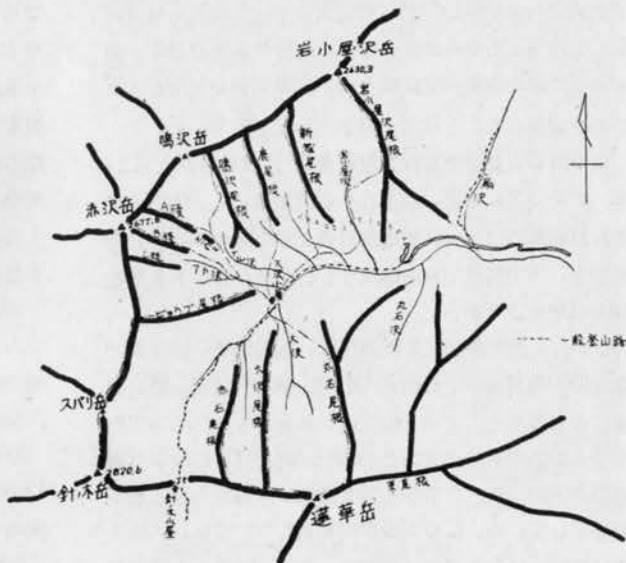
武田 睦男

概要

針ノ木岳周辺の龍川谷に面したパリエーション・ルートが開拓されたのが大正14年1月(1925)早稲田大学山岳部の第1回大沢小屋生活が行われてからであり、その後昭和5年(1930)頃迄大沢小屋を中心に行われている。この時期が龍川谷に於ける雪積期パリエーション、ルート開拓のピークであった。そしてこの間に昭和2年12月30日の龍川本谷での新雪表層雪崩による遭難があり早大の大沢小屋生活の潰滅となった。昭和5年の立教大学の御山谷生活の準備と偵察のための大沢小屋生活を最後に龍川谷側からスバリ岳西面、あるいは赤沢岳西面へと次第に黒部川側が目ざされて来て、東面は忘れられた形となった。この時期の主な記録は、大正14年早大、舟田三郎他3名大沢小屋より針ノ木峠～針ノ木岳スキー登頂。昭和元年、舟田以下7名大沢小屋～ゴルジュ～アレート～スバリ岳登頂。昭和2年、鈴木勇他5名、赤石沢より蓮華岳。同鳴沢、赤沢分岐より鳴沢岳、近等正他2名同、扇沢、三岐より爺岳。四ツ谷竜胤他3名。同年12月30日、龍川本谷にて雪崩のため家村貞治、山本勘二、関七郎、上原武夫の四名遭難。昭和3年5月～6月冬山遭難捜索のため入山。同、渡辺以下4名大沢より蓮華岳ゴルジュ直上雪渓よりスバリ岳、江口他3名。ナル沢より鳴沢岳、江口他3名。大島正一他5名ゴルジュより5番目の雪渓よりスバリ岳。以上早大山岳部。昭和5年3月～4月、立大小原他2名、新越を登りビョウブ尾根を下る。同日京大今西、高橋この逆コースをたどる立大小原、逸見他1名、大沢右俣より蓮華岳。以上のように沢を登ったものが多く見られる。

アプローチ

大町より大沢小舎まで約20K、蓮華岳北面の大沢と龍川本谷との合流附近、左岸台地の岳樺林の中にある大沢小屋まで入山路は昭和31年関西電力の黒部川ダム建設のための専用道路が出来たといえ、夏山シーズンの大町一扇沢間(くわしくは扇沢合流より30分下の岩岳小沢の所が終点となっている)のバス便があるのみでその他の期節は大町より葛温泉行きバスにて大出で下車ここより歩くか、タクシーを利用するかの方法しかない。特に冬期間(春山も含めて)は専用道路は大町ルート・トンネルに入る所までの間に数ヶ所もラビーネン・ツーク(雪崩道)があるので龍川の沢通しの方が安全と思われる岩



小屋沢を過ぎるといよいよ登山路である。右岸では尾根が急な斜面となって龍川に伸びているが左岸では台地状となって大沢まで続く。この台地は三つに分れ下を鹿尾根台地、真中を鳴沢台地、上を赤沢台地と呼ぶことにする途中鹿尾根台地と鳴沢台地の間の沢と、アカ沢では龍川谷まで押し出されている大きなデブリがみられる。このデブリは雪湿潤雪崩で春雪崩であるので降雨後は特に注意されたい。

岩小屋沢尾根

岩小屋沢岳主峯から扇沢、岩小屋沢間に延びている。針ノ木周辺では最も大きな尾根のうちの一つである。尾根の末端は関西電力の専用道路が走っている。取付点は龍川、扇沢合流点からのものが一番長く時間もかかると思われる。雪の多い時にはこれを利用するのがよいだろう。もう一つは岩小屋沢側に延びているものである。この方が時間の短縮は得られよう。この尾根と前記尾根とのジャンクションから落ちているルンゼは3月頃迄はナダレが道路まで押し出しているから注意が必要だ。4月以降になると雪が少ないので下部では敷こぎになるので早朝の雪のしまっているときには小さなルンゼにルートをとるとよい。ジャンクション付近はテントも幾つか張ることの出来るような広々とした所である。

こゝで記録をみると「足をとるブッシュをさけて雪面を行く。東面(扇沢側)に岩場と草付きの所があり、そのあとは再び雪後でナイフ・リッジ(ナイフの刃のように

切れたやせ尾根)へと続く、西面は岩小屋沢、東面は扇沢側へと一気に落込んでいる。正面には最後の雪壁がある。下部は切れて草付きの岩場を露わしている。この雪壁の下はすっぱり切れてもろい岩壁をなしている。また草付きのため、雪の状態が悪くなっているので午前10時を過ぎると危険と見なければならぬ。そして雪壁が終ると頂上である。残雪期初登攀 約3時間

新越尾根

比較的楽な尾根である。夏は開電の測量のための道としてつけられたものが現存もなお残っている。取付きから一貫して広い尾根は国境稜線下300米位の鞍部まで続く鞍部附近は岩小屋沢側に赤黒いもろい岩がすっぱり切れて落込んでいる。これから上は雪の斜面を岩の切れた上に廻り込むように登る地表面は草付きでシュルンドが多い。岩を廻り切るとあとはなだらかな斜面が稜線へと続く。約3時間

鹿尾根

この尾根は複雑な尾根である。取付きからブッシュの急な傾斜をしばらく登るとやがてや、平な所へ出る。これからはブッシュも少く割合登り易い。森林帯からぬけ出すと尾根がすっぱりと切れている所があり、上から延びている尾根がそこで左右に分れている左側は両側岩壁のクロー・アールになって深く鳴沢側に切れている。右側のクロー・アールに降りてここを登って右側の尾根に取付いてシュルンドの無数にあるや、ゆるやかな尾根を過ぎると小さな岩峰につき当る。ここより約50米程ナイフ・リッジでブロックが所々に残っているののでいやな所である。これを過ぎると稜線まで雪の斜面が続き、雪庇の下に消えている。初登攀 約4時間

鳴沢尾根

鳴沢台地から取付くものと赤沢台地から廻り込むルートが取れるがいずれも下部はブッシュが多く快適ではない上部は鹿尾根側は切れ込んでいるのに反し鳴沢側はゆるやかな傾斜をもっているため逃げ道としても考えられる稜線直下で尾根は鳴沢第2峯リンネへと消えている。右手は逆層の岩場、左手はひどいブッシュの岩後であるリンネは約200米で上部にシュルンドがケケ所ある。

初登攀 約3時間

赤沢・A稜・B稜・C稜

○A稜 赤沢台地をナル沢側に出てインゼル(島)を右に廻って出る。しばらくナル沢を登る。いよいよ取付きにつくと右側の雪面が登りやすい。赤沢側は傾斜も急である。赤沢側の急斜面の上に出るとナル沢側が急勾配になって、稜線に直上しているリンネに落ちている。稜線迄雪面を登る、ナル沢側は不安定。初登攀約3時間

○B稜 取付きはアカ沢側は赤っぽい岩が露出しているA稜側雪面の岳樺林を過ぎると60米位の大きな三角状岩

壁に出る。こゝを右にまき、急な斜面を岩壁にそって登りきると上部の尾根に出る、あとは雪面這松帯が頂上まで続く。初登攀 約4時間

○C稜 未登攀のルートである、下部取付きはB稜とあまり変わらないようである。B稜岩壁と同じ位の高度に急なナイフ・リッジが見られるがこれが登攀のキ・ポイントでありあとは稜線まで広い雪面である。

ピヨウブ尾根

大沢小屋のすぐ上に延びている尾根である取付きはアカ沢側へ少し入って雪の斜面を登るとよい。森林帯はどれが尾根筋がよく分らない、森林帯をぬけると所々シュルンドがある主にアカ沢側である。やがて一つのピークを越すと広い尾根が段々状になって、国境稜線へと続く約3時間

赤石尾根

赤石沢を左に見て登り出す、雪の斜面と言った方がよい位の広い森林帯で傾斜も大分急である。約1時間で森林帯をぬけると瘦た岩稜に出る。赤石沢側は切れているので這松帯の横のせまい帯状の雪の着いた所を登る。しばらく雪面を登るとまた瘦せた急な岩稜に出る、所所にブロックが乗っていて不安定である。この一番の難関を突破すると稜線まで広いゆるやかな斜面が続く、これから1時間で稜線である。初登攀 約4時間

大沢尾根

最初から少し急な瘦尾根がしばらく続く、雪の状態が悪い、標高2000米あたりから尾根も広くなり快適な登攀が続く、「2時間も登った頃赤石側にガレている所あり古くに張られたと思われる細い針金が木に食込んでいる(フィックスのためではないかと思われる)」続いて急な雪のクロー・アールがありフィックスの必要がある。雪崩に注意する。しばらく登って小さな尾根のジャンクションを過ぎると広い雪面が稜線へとつながっている。初登攀 約5時間

丸石沢尾根

末端からは35年3月頃、東京北後会パーティが登っている。大沢の出合より丸石尾根に直上している急な森林帯を登る。尾根に近くなるほど急になる。やがて広い尾根へ出ると傾斜もゆるやかになり、森林の中をたどる大沢小屋から見える岩峰のずっと左を過ぎると岩場に出るので、丸石側の小さな尾根か急なルンゼを登る。この附近が一番難関だといわれる。この難関を越すと広い斜面が東尾根のジャンクションへと続きやがて頂上は近くにせまってくる。約4時間

なお文末に初登攀と書かれたものは今年5月4～7日大町山ノ会大沢合宿で初トレースされたものである。参考文献は早大山岳部報リックス、立教大山岳部報山博発行「針ノ木岳」中高橋氏の針ノ木周辺開発史による。(山博調査員、大町山の会)

おれの日陰になる者は

……信濃のわらべ歌小考(1)……

福沢 武一

人の前どに立つ奴は神田山へ連れてってゲーロの火箸で焼き殺せ。「北安曇郷土誌稿」(5)

子供は風の子。どんなに寒くても家の中にくすぐってなどいない。霜焼けで手がひどくふくらんでも戸外へとびだす。そこにはお友達が待っている。とはいつても、子供だって寒い。で、日向でぬくぬく暖たまりながら遊んでいる。そんな時、他の子がうっかりして日陰になったりする。と、立ったりかきこしと歌いだす。それがこの歌。神田山がどこで、ゲーロ(蛙)の火箸がどんなものかは知らない。知らないなりに、恐ろしい響をもっいて、あわてて立ちのかさずにはおかない。

ほとんど同様な唱えが上伊那、諏訪に多数唄われている。天神山になったり、天神様、さてはデンデン山・天狗の山になったりしていく。もとは一つだったはず。ガイロ、ダイロ、デーロ、テーツ(鉄)の変化にしても、火箸、火鉄の変化にしても同様。もとの一つを探す方法は更に多くの比較が必要。で、類称をもっと挙げると、

おれの日かげになる奴は天神の山へ連れてって、あの草この草刈りとしてツケンの火で焼き殺せ。「北安曇郷土誌稿」(5)

人の日陰になる者は死出の山へ連れてって、朝草夕草刈りかけて、焼けた火箸で焼き殺せ。「諏訪の民謡」

「木曾民謡集」は諏訪に近い。ちがうところは、天地の山、あれ草これ草、ツケギのように、など。山については諏訪の例が一番原型に近いのではないか。死出の山が神田山に、さらに天神山・天神様等々へと変化したかと思われる。どっちにせよ、色々と草を刈って、ツケン(付木)——マッチの前時代の点火物をもちだしたりして、物語り化し、文学味にとんで実にいい。「人の陰になるものは一ひと二ひと、三ひと四ひと、死ひとの山へ」(諏訪)と調子をとっていくところ、中々味な芸をやっている。

人の前どに立つ者は麦稈三本で焼き殺せ。

「北安曇郷土誌稿」(5)

ちと妙なことだが、そこが面白い。次ののだって愉快だ。内容も次第に離れていく。

人の前どに立つ奴は三本杉のおお乞食、箒木持っておどれ。同書

「人の日かげになる者は赤石山の乞食の子」(「諏訪

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料200円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

の民謡)の乞食も偶然の一致とは思われない。木曾の「おれのかげになるものはお茶一斤とるぞ」は随分打算的で笑わせる。

人の前どに立つ奴はヤメン(病)荒神ドス荒神、小便シャークで飯よくれろ。(北安曇)

これはまた異風。悪口が度はすれ。具象的で生きている。名作の一つ、次のも同様。

おらの日陰になるものは正月傷寒病み出して、盆にゃほっくり死ぬように。「小県郡民謡集」(…正月三日に病みだして盆にゃほっくり死ぬように。「諏訪の民謡」)

ここでは語品の面白さが効果的。同系のものが遠く東京に見出される。

人の陰になる奴は、えんぼし、かんぼし、かったいぼろ、盆にゃほっくりおっちんで、正月餅や食えね。(正月厄病しよって、三月くたばる赤大根)「日本伝承童謡集成」(6)

なにもこの一つに限らず、類歌が県内にも、全国にも分布しているものと思われる。それらを採集すること、その上で比較すること、——その時、原型推定の途がひらかれる。そんなわけで、仕事は今後に残されている。以上列挙したいいくつかの類型のどれについてもそれがいえる

それにしても、こうしたわらべ歌は実に愉快だ。鑑賞価値は十二分にある。変化そのものからして痛快。民謡となると、もうこのように自由自在な変化の所は失われる。わらべ歌の中でも、ここに挙げたような唱えには創作意欲が躍動す。これこそ尊重すべき点。このことを僕は強調して諸家の関心を促したい。

最後に、数すくない類称の一を挙げ、拙稿の結びとする。これは兵庫から報告されたもの。文芸性が極度に發揮される優秀作。

私の陰になるものは、親死ね子死ね。子は海へ流せ。カカ川へ流せ。トト遠い流せ。ジジじとしてれ。ババ晩の菜にしよ。「日本伝承童謡集成」(6)(屋代東高校教諭)

研究報告第1号出版

タイプ印刷で表紙及び写真一頁活版、B5版、紙質80斤使用、170頁、限定出版で150部、希望者には実費250円が頒布しているので、博物館宛申込ませたい。

都合により鳥は次号に掲載いたします。

山と博物館 第6巻第6号 1961年5月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上中町
信州印刷大町工場